

口口『Every Body feat.フランケンシュタイン』観劇レポート

宮田慎太郎 (日本大学芸術学部 3年)

この度、初めて口口の作品を観た。恥ずかしながら、いままで口口について全く知らず、SNSでその人気を知った。今回はその中の最新作、『Everybody feat.フランケンシュタイン』を東京芸術劇場のシアターイーストにて観劇した。結論から言うと、今回の観劇体験はとても心地の悪いものであった。そのため、この感想文を書くまでにも長い時間を要してしまった。

観劇を終えた後、私はとても苛立ちを覚えている自分に気づき、帰路でなぜこのような感情に苛まれているのかを考えた。一日では結論に至らず、ずるずると考え続け、もう観劇からひと月ほど経ってしまった。

その末に私がたどり着いた結論は「『それ』と客席にいる私の心情がリンクしてしまったから」である。劇中には様々な人間の遺体を組み合わせて出来た複合的生命体を、『それ』としている。原作におけるフランケンシュタイン博士が作った怪物にあたる存在である。『それ』はそれぞれの自我を歪な形で残したまま、合体させられている。蠢き方や喋り方には、酷くぞわぞわとさせるものがあり、嫌悪感さえ感じる。一方、観ている私たちはどうであろうか。

近頃、感染症対策が緩和されたことを受けて、シアターイーストでは席の間隔を空けることなく満席での観劇をすることができた。そのことは大変喜ばしいことである……はずなのだが、今回、私にとってはこれがとてつもなく苦しかった。前後左右にぎっしりと人がいる空間、呼吸を制限するマスク、そして観客席の暗さ……このすべてが私を『それ』の一部にしてしまったのである。この結果、私は舞台が進行していくにつれてライカ（『それ』を創造したキャラクター）に対して憤慨していた。最後にライカが取り込まれて、『それ』と共に朽ちていくシーンにおいては、「もっと苦しんでくれ」と思いもした。描かれていない時間の中でライカは十分に苦しんだのかもしれない。しかし私にとっては、彼には一緒に朽ちる仲間がいるのは幸福すぎるようにも思えた。独りで蟻地獄の中に沈み、重たい苦しさを受け続けてほしいという悪魔的思考にまで至った。

そんな結論にたどり着いた私は、もちろんほかにも同じように思う人がいるだろうとSNSを覗いたのだが、「美しい」「美しかった」という意見が多かった。少なくとも私が見た範囲では、美しさと言葉のテクニックに魅了された方々が多くいらっしゃった。この差はいったい何なのだろうか。

これは恐らく、今回の大きなテーマにもなっている「死」に対する意識の違いなのではないか。ライカは「忘れられずにいれば生き続けられる、だから音を残せば永遠に死ぬことはない」という考えであったように感じる。私はこれはエゴであり、醜悪であると思うのだ。忘れる、というのはあくまで他者による行動である。他者に対

して、主体である私たちから、ある部分の記憶を忘れさせたり忘れないようにさせることは大変難しい。だから「忘れられずにいけば生き続けられる」ことを成し遂げるために、その人の遺体を利用するのは、自分が仕事を休むために、勝手に誰かの名前を挙げて働かせる事変わらない。しかし、恐らくこのライカの世界観を「美しい」と捉えた方々もいるのだろう。死んだ人を追いかけて続ける少年らしい残酷さに胸を打たれてしまい、感涙した人もあったかもしれない。この「死」に対する考え方こそが、美しいと思えるかどうかを隔てた要因であろう。

私はこの舞台を「美しい」という言葉で終わらせてはならないと思う。確かに演出も役者もなにもかも、繊細ながら力強い独特な世界観があった。多数のファンがつくことも納得できる美しさも確かに存在した。しかし本作品は美しいだけで終わる舞台ではないのだ。『Everybody feat.フランケンシュタイン』は現在の私たちに「死」について考える機会を与えてくれたのではないか。こんなにも死の香りが漂う今のご時世において、当事者性を与えてくれる素晴らしい舞台であったと感じる。私が心地の悪さを感じたことは、結果として「死」を深く考える機会となったという点では、正当であったのかもしれない。

今回のタイトルの『Everybody』にはきっと私たちも含まれている。あなたは他者の死にどう対峙するか、忘れないように何か遺物を残すのか。あなたはどうか葬られたいのか、永遠に忘れられない存在になりたいのか。そんなメッセージも今回の舞台には含まれていたのではないか。まだ生きている私たちには選択する権利があるのだから、決して思考停止をしてはいけない。目の前の美しさや情景に目を晦ませてはならない。名前が無くなる前に、動かなければ。

講評 中野成樹 (演出家/中野成樹+フランケンズ主宰/日本大学芸術学部演劇学科准教授)

レポート、ありがとうございます。観劇時に自身が感じた「心地悪さ」にフォーカスし、作品の核にせまってゆきました。心地悪さは、この作品が強く放つ「死」の存在からであり、その死に『Everybody』とタイトルをつけたことへの言及、そして、この作品の上演意義にたどり着きます。多くの観客がSNSなどで、この作品を「美しい」と評していることへの疑問も投げかけます。良くも悪くも「強い観劇体験」をしたかと思えます。今後、では宮田さんが「心地よい」と感じる観劇は、どういったものになるのでしょうか？ その対比をすると、あなた自身の演劇がより明確になっていくかもしれません。期待しています。